

リベラルアーツこそが重要だ

大学のリベラルアーツ（教養教育）をめぐる議論が迷走している。近年、わが国では「リベラルアーツ教育を縮小し、実践教育を重視すべきだ」との主張が勢いを増している。6月8日に下村文部科学相が、全国の国立大学法人に対して、中期目標・中期計画の策定に当たり、教員養成系や人文社会科学系の学部・大学院の廃止や転換に取り組むことなどを求める通知を出したことも、こうした議論に拍車を掛けた。

しかしながら、筆者は、今後わが国ではリベラルアーツの重要性が高まることすらあれ、低下することはあり得ないと確信している。変化の速い現代では、実用的な知識や技術はすぐに陳腐化する。その意味で、今ほどわが国の歴史・文化・伝統を踏まえた、深みのある議論が求められている時代はないのだ。

筆者は立場上、テレビの経済番組などでコメンテーターを務める機会が多い。地上波の番組の場合、一回のコメントの長さはせいぜい1分～1分30秒程度だ。NHKの「日曜討論」では、50秒たつとランプが点灯し、1分を過ぎると点滅する仕組みになっている。

しかし「わずか1分間」と侮ってはいけない。筆者は職業柄、コメンテーターの潜在的な力量を一発で見抜く自信がある。

数年前、超一流の「絵師」の方の話を伺う機会があった。優れた絵師は、小さなお皿に絵を描く際でも、畳何畳分かの大きな部屋に絵を描くイメージを抱いて、膨大なエネルギーを小さなお皿に集約するそうである。

テレビコメンテーターに関して、視聴者に分かりやすいように「簡単なコメント」——緩い球を投げても、プロが見れば、それが精一杯の全力投球なのか、もっと速い球を投げる力のある人があえて緩い球を投げているのか、は一目で分かるのだ。

異分野との交流は様々な価値を生み出す。身近な例では、1970年代に一世を風靡した「ピンク・レディー」の楽曲がヒットした秘密をご存知だろうか？ その理由は、作曲家が「民謡」のリズムを取り入れたからである。すなわち、「歌謡曲」という枠の中だけで作曲を行っている、斬新なメロディーは生まれにくい。「歌謡曲」の常識を打ち破り「民謡」のリズムを取り入れる——大袈裟に言えば、異分野との交流こそが新たな価値を生み出すのだ。

実際リベラルアーツを学ぶと、単純な事象でも深く考察することができる。以下では2つの事例を挙げたい。

第一の事例は、「日本型民主主義」である。わが国では政治への不信感が蔓延している。内閣府が2015年3月に発表した世論調査によれば、国民の7割弱が国の政策に民意が十分に反映されていないと回答している。

政治が再生するためには何が必要なのだろうか？ 筆者は、議員や国民が議論を尽くすこと——すなわち「熟議」の徹底こそが日本政治再生の最大のカギだと考えている。

歴史的に、日本には「熟議」を行う伝統がある。例えば、わが国の神話に登場する神々は、何かあ

るとすぐに集まって議論する。天照大神が天岩戸にお隠れになった際にも、八百万の神々は対応を協議した。聖徳太子が制定した「憲法 17 条」や、明治維新の際に公布された「五箇条の御誓文」にも、「熟議」を尽くすことの重要性が謳われている。

こうした主張に対しては、「『決められない政治』を助長するのか？」と反論する向きもあろう。しかし、わが国の「決められない政治」は、決して議論をやり過ぎたことに起因するものではない。国対政治が横行し、最悪のケースでは「牛歩戦術」すら講ずる——すなわち「熟議」の不足にこそ「決められない政治」の原因があるのだ。

具体的な改善策として、国政レベルでは、党首討論をより一層頻繁に行う、国会答弁の際にメモを読み上げることを厳格に禁止する、といった対応が考えられる。草の根レベルでは、海外で一般的な、無作為抽出した住民に特定のテーマを議論させる「ミニ・パブリックス」などの手法が有効だろう。

第二の事例は「原発問題」だ。

筆者は、短期的には、安全性を徹底的に検証した上で一部の原発は稼働せざるを得ないが、向こう 20～30 年間程度の中長期的なタイムスパンでは、自然エネルギーへの転換を肅々と図っていくべきだと考えている。

そもそも、西洋と日本では「自然」に対する捉え方が根本的に異なる。そして、この違いは、両地域の哲学観・宗教観に起因している。

二元論的な発想をする西洋では、自然は人間の外にあり、人間に対立するものだと考える。例えば、近世哲学の祖と言われるデカルトは、自然を生命のない大仕掛けの機械だと考え、自然科学の発展を通じて、人間が自然を利用することに主眼を置いた。

これに対して、一元論的な発想をする日本では、自然は人間の内にあるものである。古来、日本人は自然を神聖なものだと考え、自然と一体化する生き方を重視してきた。

こうした発想の違いを前提とすれば、本来わが国はグローバルな環境問題のフロントランナーになるべきだろう。わが国の歴史を踏まえた上で、国際社会に向けた「環境立国」としての情報発信が望まれるところである。

陽明学者として、戦後多くの政治指導者に強い影響を与えた安岡正篤氏は、「思考の三原則」として、①目先に捉われないで、出来るだけ長い目で見ること、②物事の一面に捉われないで、出来るだけ多面的に、出来れば全面的に見ること、③何事によらず枝葉末節に捉われず、根本的に考えること——の 3 点を挙げている。

これらの視点に照らせば、リベラルアーツを学ぶことが、思考を深める意味で、極めて重要であることは疑う余地がなかろう。リベラルアーツは、人類の悠久の歴史、世界の様々な宗教の本質、日本と西欧の根本的な発想法の違いといった人間の思索にとって不可欠な基盤を、われわれに与えてくれる。筆者は、わが国の歴史・文化・伝統を踏まえた上で、今後の日本経済の動向や、わが国が進むべき道などについて、長期的、多面的、根本的に考察していきたいと考えている。

[著者]

熊谷 亮丸 (くまがい みつまる)



執行役員 調査本部 副本部長
(経済調査・金融調査担当)
チーフエコノミスト
専門は、経済調査、金融調査全般